

加藤 宏 伝説から歴史へ

スペイン人に対する素朴なイメージとして世界に広まっているもの一つは、彼らが南米大陸などで殺戮の限りを尽くした暴虐な一面を持つ民族だ、というものだ。そのように理解せざるを得ないような事実があったのは確かだろうが、しかし、このようなスペイン人に対する否定的なイメージ―暗黒伝説 (the black legend) というらしい―が広まったのは、スペインを仮想敵国としていたイギリスが、国際世論や国内世論に対して何百年にもわたって続けたキャンペーンの成果なのだ―という意見を、ある本で読んだことがある。そして、そのようなイメージが広まったのは、スペインがこれら敵対的なキャンペーンに対して適切な反論を繰り返す努力を怠ったからだというのだ。

この議論が正しいかどうかを評価する知識を筆者はもちあわせないが、まあ、そのようなことがあったとしても不思議ではないと感じる。イギリスもフランスも、オランダも、大航海時代において、似たようなことをやっていた―スペインだけが突出していたとは言えない―という可能性は大いにあるだろうからだ。しかし、いったん確立した伝説を覆すのは難しい。スペイン人も、今となつては、「他国も同じことをやっていたではないか」とはなかなか言えないだろう。さて、このようなことをつらつら考えながら、私の関心事 (職業) である日本の国際協力に思いを転じてみると、ここにも、ある種の伝説が、少なからず―特に誰の意図でもないにせよ―流布しているのではないかと感じる。いわく、日本の援助は経済的動機によって突き動かされている、アジアに偏している、額が減り続けている

る……等々。そのような理解がまったくの的外れだとは言わないが、少なくとも、真実の全体ではないことは間違いない。国際社会の日本の国際貢献への関心と理解は近年、深まっているとはいえ、過去にいったんできあがった理解が大きく修正されることはなかなか難しい。なぜこうなったのか？ 日本の側に国際社会に対して、的確・説得的に説明するだけの能力がなかったのか。あるいは日本の援助を観察する側が、その実態を虚心坦懐に理解するだけの感受性を持ちえなかったのか？―おそらくその双方なのだろう。そして国内の国際協力に対する理解にも同様のことが言えるかもしれない。

したがって、出上がっている評価の中に「伝説」が含まれているとすればその再生産を防ぎ、また新たな望ましくない伝説が生まれないようにする努力が必要だ。生きた「歴史」を書き続けていくことが必要だということだろう。逆に、ブランド戦略ないしマーケティング戦略の観点からすれば、望ましい内容の伝説については、その生成を促しあるいは少なくともその生成を妨げないことが正しい振る舞いなのだろう。ODA六〇周年に当たった昨年に、国際協力の歴史を振り返りながらその将来を展望しようという取り組みをJICA研究所では始めたが、そのような努力が一過性のものであつてはならないことは自覚している。実務者とアカデミアの共同作業により、歴史記述を残す―あるいは将来の歴史家による分析にたえる記録を残しておく―ことの重要性を強く感じる。それが、先人たちに敬意を払いその努力を引きついでいく者としての責任であるうとの思いを強くしている。

かとう ひろし / (独) 国際協力機構理事

1954年生まれ。東京大学 (文学部東洋史学) 及びハーバード大学 (公共行政学修士課程) 修了。1978年JICA (当時の国際協力事業団) 入団。その後、企画部、アジア1部、国際協力総合研修所、研究所などで勤務。2013年10月から現職。国際開発学会理事。